

会話能力測定法におけるタスク開発

—複言語・複文化社会を背景にしたビジネス日本語—

伊東 祐郎（国際教養大学）

赤木 彌生（東亜大学）

嶋田 和子（アクラス日本語教育研究所）

六川 雅彦（南山大学）

鎌田 修（南山大学）

由井 紀久子（京都外国語大学）

要旨

本発表は、科研費による口頭能力試験開発に関する妥当性検証、とりわけ目標言語使用領域のうち、ビジネスに焦点を当て、開発の経緯及び測定対象となる構成概念、また、評価の方法について経過報告を行い、将来の複言語・複文化社会に向けて、妥当性の高いテスト開発につなげることを目的とする。この領域の機能的言語運用能力とは、提示されたイラストから場面や状況を理解し、職業人として社会的・文化的に相応しい日本語で表現ができ、さらに、商習慣を踏まえ、現在あるいは将来の展開を予測し、意見を述べたり提案したりできる能力として想定している。複言語・複文化の人々がそれぞれ有している言語知識を用い、問題解決や批判的思考を含むタスクをどの程度遂行できるかを中心に評定することをねらいとしている。テスト開発においては、課題に対して発せられる有意味な発話データを得ることが妥当性を高くすることにつながる。タスクの有用性及び妥当性について発表する。

【キーワード】 口頭能力, パフォーマンス・テスト, ビジネス日本語, 妥当性, タスク

Keywords: speaking ability, performance test, business Japanese, validity, task

1 新スピーキングテスト「JOPT」の特徴とねらい

口頭能力試験として ACTFL-OPI (Oral Proficiency Interview) が広く知られているが、テストの実施に 30 分という時間がかかり、また、テスター養成にも多くの時間と経費が必要となる一部の専門家向けテストとなっている。実施するには資格認定など複雑な手続きがあり実用性に乏しいと考えられる。

そこで、それらの課題を克服するために、専門家のみならず、一般の日本語教育に関係する者（ボランティア教師、国際交流スタッフなど）や一定の日本語能力のある非母語話者という広く複言語・複文化を背景にした人々が容易に実施できるテストの開発を目指して、筆者らは科学研究費補助金基盤研究（A）のもと、2013 年より対面式テストの開発に着手した。すなわちテクノロジーを活用した、しかも誰でも実施できる、汎用性をもった新しい日本語口頭能力テスト「JOPT (Japanese Oral Proficiency Test)」の開発を行ってきた。

2 JOPT の構成と内容

JOPT は ACTFL-OPI の半分の 15 分程度で口頭能力を測定できるように設計した。実施形式は対面式で、実施時間は短いが多方面における能力測定を行うため、口頭能力の測定領域を、アカデミック場面 (ACADEMIC)、ビジネス場面 (BUSINESS)、コミュニティ場面 (COMMUNITY)、介護場面 (KAIGO) と絞り込み、4 領域の構成にした。実施者が ACTFL-OPI のように特別な訓練や資格がなくても実施できるように、質問は事前に決められた固定型となっている。また、受験者の興味や関心を引き起こすために視覚的プロンプト形式 (近藤, 2014) を取り入れた。これにより談話的能力の評価を効果的に行える。また一部の領域にロールプレイを導入し、ある場面で目標タスクがどの程度できるかの測定も可能になっている。対面式ではあるが、ACTFL-OPI のような自由な話題展開を行うインタビュー形式ではない点が JOPT の特徴である。受験者は希望に応じて、どの領域を受験するか選択することができる。以下に 4 領域の特徴と測定対象を紹介する。

●ACADEMIC：主として高校生以上の学生を対象に、アカデミックな世界で必要とされる機能的言語運用能力を測る。この領域の機能的言語運用能力とは、グラフなどを読み解いた上で、事実の説明、解釈、評価を述べたり、自然法則や学術的な規範や規則等に基づいて根拠に基づく主張や議論したりできる能力をさす。

●BUSINESS：主としてビジネスパーソン、及び、今後ビジネスの世界に入ろうとする人材を対象に、その世界で必要とされる機能的言語運用能力を測る。この領域の機能的言語運用能力とは、提示されたイラストから場面や状況を理解し、職業人として社会的・文化的に相応しい日本語で表現ができる能力である。その上で、商習慣に従い、現在あるいは将来の展開を予測し対応できる能力を含む。

●COMMUNITY：主として定住者を対象に、地域社会（コミュニティ）の生活場面における機能的言語運用能力を測る。この領域の機能的言語運用能力とは、身近な生活場面のイラストを見ながら、文化背景や状況を理解した上で、状況や事実関係、経緯などについてそれに相応しい日本語で描写・説明でき、さらに、テーマに即した意見述べができる能力である。生活場面における人間関係に配慮した相応しい応答ができる能力も対象としている。

●KAIGO：介護に従事している人、また介護の仕事に就く準備をしている人を対象に、介護分野で必要とされる口頭能力を測る。この領域における口頭能力とは、提示された介護場面のイラストを見ながら、状況や事実関係、経緯などについてそれに相応しい日本語で描写・説明、さらには伝達できる能力である。さらに、介護場面において利用者への声掛けや、同僚や利用者との間で相応しいやり取りができる能力を含む。

各領域の問題は、3つのステップ（STEP）で構成されている。各ステップは複数の問題群から構成されている。ステップ毎の違いは問題の構造、すなわち受験者に求める課題の違いと機能的・形式的負担度、そしてテーマやトピックで特徴付けられている。各領域の能力規定は以下のとおりである。

表1 JOPTの構成と内容

領域	測定する口頭能力	STEP-1	STEP-2	STEP-3
ACADEMIC (JOPT-A)	大学生のアカデミック場面における機能的言語運用能力	【共通】 自己描写（自分に関する簡単な説明）	事実説明・発表（量的データをもとにした事実説明，仕組みの説明）	意見述べて（事実に対する評価・分析ならびに根拠を示した意見述べて）
BUSINESS (JOPT-B)	ビジネス場面における機能的言語運用能力		事実説明・やり取り（様々なビジネス場面における商習慣を踏まえた説明ならびにやり取り）	意見述べて（将来の展開を予測・判断しての意見述べてや提案）
COMMUNITY (JOPT-C)	生活場面における機能的言語運用能力		事実説明・やり取り（生活に関連する手続きなどの説明ならびにやり取り）	意見述べて（根拠述べて，人間関係に配慮した適切な言語による課題遂行）
KAIGO (JOPT-K)	介護場面における機能的言語運用能力		事実説明（介護場面のイラストを見ながら状況や事実関係，経緯などの説明）	できごと報告・声掛け・やり取り（介護利用者への声掛けや職場同僚とのやり取り）

3 ビジネス日本語の背景

2008年の留学生30万人計画において「外国人留学生の日本国内での就職率を現状の3割から5割に向上」することが発信された。これを受けて、「留学生就職促進プログラム」（文部科学省）が策定された。このプログラムの成果報告において、ビジネス日本語についても言及がなされている。「ビジネス日本語とは「一般日本語（General Japanese）」や高等教育機関に進学するためのアカデミックジャパニーズ（Academic Japanese）」と異なり、ビジネス場面で必要とされるコミュニケーションのための日本語を指す」と定義されている。しかし、ビジネス日本語教育の実施率については、キャリア教育やインターンシップに比べて低いことが指摘されている（日本国際協力センター，2020）。実施機関の物理的な問題が多いが、その中で留学生の日本語能力が低いことや留学生にビジネス日本語の有用性が理解されていないことも理由としてあげられている。一方、ビジネス日本語やキャリア教育の受講経験者のほうが、就職に有利であることも報告されており、ビジネス日本語の推進が課題とさ

れている。

「留学生就職促進プログラム成果報告書」（日本国際協力センター，2020）では、企業側が求めるスキルでは日本語能力が最も高い。実際に就職をしている留学生の日本語能力は、日本語能力試験の N1，N2，N3 とある。しかし、企業側からは、狭い場面だけではなく、より幅広い場面でのコミュニケーション能力が求められている。日本語能力試験は、生活場面でのコミュニケーション能力を測定するもので、ビジネス場面など職域などに特化した場面でのコミュニケーション力を測るテストではない。また、ビジネス場面での適切な語彙・表現や敬語だけではなく、「課題設定・解決能力」「自分の意見を発信する力」などの能力やスキルへの期待も高いことがわかる。

このような背景を受け、ビジネス場面での発話能力を測定するテスト、JOPT-Business（JOPT-B）の研究開発を行った。JOPT-B の機能的言語運用能力とは、提示されたイラストから場面や状況を理解し、職業人として社会的・文化的に相応しい日本語で表現でき、さらに、商習慣を踏まえ、現在あるいは将来の展開を予測し、意見を述べたり提案したりできる能力だと考える。日本のビジネスパーソンらしく言うべきというステレオタイプに基づくのではなく、複言語・複文化を背景にした人々がそれぞれ有している言語知識を用い、問題解決や批判的思考を要求するタスクをどの程度遂行できるかを中心に評価する。

4 JOPT-B の実施方法

本節では、JOPT-B を取り上げて、JOPT の具体的な実施方法を紹介する。ACTFL-OPI のような長期に及ぶテスト養成は行わないが、テストは事前に実施マニュアルを読んで留意点については可能な限り従うことになる。大切なことは、受験者が潜在的に持っている発話能力をできるだけ多く引き出せるよう、テストには温かい雰囲気を醸し出すように心がけることが期待される。また、実施時間の目安は 15 分と決められているが、受験者の発話内容によって、多少の違いが出てくることもある。短く

でも長くても、受験してよかったと思えるよう、達成感が感じられるように配慮することも重要となる。

◆ 〈STEP-1〉の概要

STEP-1 は、受験者自身の日常的な身近情報に関わる質問から構成されている。受験者自身の名前、住所、職場や学校までの交通経路やかかる時間、今住んでいる町の特徴などである。また、一日の行動を時系列で述べたり、その日の気分などを表現するような質問などである。この段階では、発話能力の測定よりも受験者の気持ちを和らげ、話すための口慣らしの段階として位置づけている。質問内容は、認知的負担がかからないような質問で構成されている。与えられた質問に対して容易に苦勞なく答えられる問題である。発話に求められる能力や知識は、学習初期段階の文型や語彙がほとんどで、ウォームアップとして位置づけている。

◆ 〈STEP-2〉の概要

STEP-2 では、イラストで示されるトピックが理解できるように、まず、「はい」か「いいえ」で答えられる質問から始まる。次に、イラストの場面や状況の説明を求める質問が続く。問題によっては、イラストで提示された状況が発生した理由や、原因、また、イラストの状況が他に与える影響など、理解していること、わかっていることを言語化することが求められる。ここでは、説明能力を測定する段階で、与えられた客観的な知識・情報の内容や論理の展開を把握し、必要に応じて知識の活用を必要とする能力の測定を目的とする。

◆ 〈STEP-3〉の概要

STEP-3 では、あるテーマやトピックについての自らの意見が求められる質問から構成されている。意見を述べるために、根拠や理由、また、ある課題解決に向けての判断力なども含まれる。STEP-3 のイラストは、STEP-2 のイラスト活用と異なり、テーマとなる問題について発話を引き出すものである。イラストから状況を観察して事象の背景を分析し、その傾向・特徴・確率などを把握する力が求められる。また、自らの学習経験や分析力・統合力を生かして、現実世界で直面する問題・危機に対して

効果的な判断ができる力を発話内容から測定する。新たな理論・独自の価値観などを整合して、まとまりのある発話ができるかどうかを測定の対象とする。

5 JOPT-B のサンプル問題

JOPT-B は、ビジネス場面でのコミュニケーション能力を測定する。ビジネス場面そのものやビジネス上の人間関係を理解し、描写、適切な表現、意見述べ、課題解決についての質問からなる。テストは、STEP-1（導入）、STEP-2（イラスト描写、意見述べ、定型表現）、STEP-3（意見述べ、問題解決、ロールプレイ）である。STEP-2、STEP-3 には、それぞれ異なる場面が 2 枚あり、異なる 4 つの場面について質問が設けられている。STEP-1 では、受験者とのラポール作りのための身辺情報に関わる質問が 10 問あるが、これは評価の対象とはしない。STEP-2 では、会社や店舗での対応などビジネス場面を扱い、STEP-3 では、会社における問題などを扱う。STEP-2 は、質問 0 から 3 まで 4 問ある。質問 0 は、STEP-2 のテーマへの導入で、評価対象外である。質問 1 は、ビジネスに関するイラストについて描写をする。質問 2 では、ビジネス場面での事象に関して配慮する点について意見を述べる。質問 3 では、ビジネス場面での人間関係を理解して定型表現を述べる。STEP-3 は、質問 0-3 まで 4 問ある。質問 0 は STEP-2 同様、テーマへの導入で評価対象外である。質問 1 は、イメージイラストを見ながら、テーマに関しての意見を述べる。質問 3 では、テーマに関する問題についての解決策を述べる。質問 4 は、ロールプレイで、テスターとテーマに関する会話を 3 ターン程度行う。以下に例を示す。

STEP-1：導入の質問（抜粋一例）

1. お名前を教えてください。
2. 今、学生ですか。仕事をしていますか。
5. アルバイトをしたことがありますか。
6. ビジネス日本語を勉強したことがありますか。
7. インターンシップに行ったことがありますか。



図-1 STEP-2 イラスト

10. 日本語で好きなことばを一つ、教えてください。

STEP-2 : 「ケガで休みを取る (電話)」

0. ケガや病気で仕事や学校を休んだことがありますか。

1. イラストについて分かることを話してください。
 2. 仕事が忙しいです。でも、ケガや病気で仕事を休まなければいけなくなりました。その場合、どんなことに気をつけたらいいですか。

3. ○○さんがケガや病気で仕事の休みを取りたいとき、電話で会社の人に何と言いますか。



図-2 STEP-3 イラスト

STEP-3 : 「社内試験」

0. 日本の会社にはいろいろな試験があることを知っていますか。

1. 会社によっては、社内の試験に合格しないと昇進できません。そのことについてどう思いますか。理由も話してください。

2. ある会社では、社員は全員、社内試験を受けなければなりません。でも、多くの社員は、毎日仕事で忙しくて勉強の時間が取れません。会社としては、どうしたらいいと思いますか。

3. これからロールプレイをします。 ○○さんの会社では、全員が受けなければならない社内試験があります。合格するためにはどうしたらいいか、課長に相談してください。 課長 (テスター) : ○○さん、どうしましたか。受験者 : (解答)

6 JOPT-B の評価表と採点

JOPT-B における評価は、受験者の回答発話を基に受験者のパフォーマンス (言語行動, 言語運用能力) を評価の対象にする。具体的な評価シートは以下の通りである。

「機能面」とは、インタビューにおいて収集した発話サンプルに基づいて口頭面にお

いてどの程度の能力を発揮したかを判断するもので、タスク達成度として位置づけている。「形式面」は、「語彙」「文法」「発音」「談話構成」「流暢さ」の5要素からなる運用能力である。評価は以下に示すルーブリックを基に行う。

表2 JOPT-B のルーブリック

評価点	機能面	形式面				
	①タスク達成度	②語彙	③文法	④発音	⑤談話構成	⑥流ちょうさ
5 	課題について、自力で対応できていますので、他者からの助けはほとんど必要ありません。100~81%	コミュニケーションを進めるための語彙や表現がうまく使えています。	コミュニケーションを進めるための文法がうまく使えています。	コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションに分かりにくさや不自然さは見られません。	話にまとまりがあり、つながりもよく、非常に分かりやすいです。	スラスラと話し、コミュニケーション上支障をきたす流ちょうさの問題は見られません。
4 	課題について、ほとんど自力で対応できていますが、ある程度他者からの助けが必要です。80~61%	コミュニケーションを進めるための語彙や表現がほとんどうまく使えています。	コミュニケーションを進めるための文法がほとんどうまく使えています。	コミュニケーションを進める上で発音やイントネーションに分かりにくさや不自然さはあまり見られません。	話にまとまりがあり、つながりもよく、分かりやすいです。	たまに言葉に詰まりますが、コミュニケーション上支障をきたす流ちょうさの問題はほとんど見られません。
3 	課題について、何とか自力で対応できていますが、かなり他者からの助けが必要です。60~41%	コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がときどき見られます。	コミュニケーションを進めるための文法の問題がときどき見られます。	コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがときどき見られます。	話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりしますが、おおよそ分かる話が出ています。	ときどき言葉に詰まりますが、コミュニケーションはできています。
2 	課題について、応答が不十分で自力で対応するのは難しいです。他者からの助けがたくさん必要です。40~21%	コミュニケーションを進めるための語彙や表現の問題がよく見られます。	コミュニケーションを進めるための文法の問題がよく見られます。	コミュニケーションを進める上で問題となる発音やイントネーションの分かりにくさや不自然さがよ	話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることがあります。	言葉がしばしば途切れ、コミュニケーションが成り立ちません。

				く見られます。		
1 	課題について、達成するのが難しく、応答もほとんどできていません。他者からの助けがたくさんあっても、自力で対応するのはほとんど不可能です。 20~1%	語彙や表現の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	文法の問題が多く見られます。そのため、コミュニケーションがうまく進められていません。	発音やイントネーションの問題が多く、コミュニケーションがうまく進められていません。	話にまとまりがなかったりつながりが分かりにくかったりすることが多いです。	言葉が頻繁に途切れ、コミュニケーションの流れが止まっています。／滞っています。
0 	課題が達成できていません。 0%	基本的な語彙を使うのも難しい。	文法力が乏しく、コミュニケーションができない。	発音やイントネーションの問題があり、コミュニケーションができない。	話にまとまりがなく、全くわからない。	必要な言葉が出ないため、会話が成立しません。

7 JOPT-B の測定能力と妥当性検証

最近のテスト開発では、テストの妥当性を高めるために、言語能力がどのような場面や状況で運用されているかを実証的に明らかにしようとする試みがみられる。その背景には Bachman (1990) の試験開発における妥当性検証で指摘されているように、目標言語使用領域 (Target Language Use) の検討が極めて重要であることと深く関係していると思われる。今回の JOPT-B の妥当性検証では、課題であるタスクの達成度が妥当性の核となることから、具体的な問題例を示しながら Bachman のモデルを参照して検証を試みた。結果的にはパフォーマンス・テストである口頭能力テストの課題についてはほぼビジネス場面に特化した話題や課題であったために妥当性は高いと判断できよう。しかしながら、話しことばによるコミュニケーション力を測定するツールであるために、タスク以外の領域、形式的言語運用能力の測定も不可欠であることから、JOPT-B は以下に示す 7.2 以降の観点をも評価に反映することによって妥当性を満たす要件を担保していることを確認した。

7.1. タスク達成度

我々が日常生活の中で発話する状況を考えると、様々な状況で多様な表現の

仕方を身につけている。家族との会話、友人・知人との挨拶や会話、学校や職場での友人や同僚との対話など、実際の口頭表現には数多くの側面がある。社会での人間関係の違いによる表現の使い分けは、適切で円滑なコミュニケーションの実現には欠かせないものとなる。

定型表現としての挨拶とは異なり、状況の変化や場面の展開の仕方によっては、予期しない発話が求められることがある。たとえば、時間に間に合わなかったときの謝罪表現や感激したときの驚きの表現、また、依頼や言い訳など場面や状況に応じて日本語を適切に使用する能力が求められる。社会言語学的能力とは、このように人や社会との関わりの中で言葉を適切に運用できる能力である。

7.2. 語彙・文法・発話能力

自分の頭の中にある事柄や思いを話し言葉で正確に伝えるためには、一つ一つの言葉を正しく発音できることが求められる。日本語には特殊拍（長音、促音、撥音）がある。その他に拗音、濁音、清音がある。これらを正しく発音することによって、発話内容が誤解無く正確に伝授される。イントネーションやストレスなどもわかりやすさという点から考えると正しく運用することが必要である。そして、発話内容を単語レベルから文レベルに高めるためには個々の単語をつなぎ合わせて文にするための文法知識も必要となる。また、表現を豊かにするための語彙力も不可欠な能力である。ここで言う文法能力は、言語運用力を支える語彙、発音を含んだ広い意味での能力として捉えている。

7.3. 談話能力

学校や職場などでは、日常のたわいもない会話にとどまらず、あるテーマに沿って発表したり説明したりすることがある。一人でまたあるときは複数人で議論をしたり、意見交換をしたり、長時間話すことがある。事前に話す内容をまとめ、趣旨を考えて、全体の構成などを検討した上で、本番に臨むような状況、例えば、スピーチやプレゼンテーションなどをする場合もあれば、時には、十分な準備もなく、その場の話題や状況に応じて、臨機応変に対応しなければならない場面もある。い

ずれの場合においても、談話能力は意味のある発話を創造的に構成し、内容自体に結束性をもたせることは、相手に理解してもらい、意味のあるコミュニケーションの成立には重要な能力である。

7.4. 方略的能力

会話や対話などでは、相手の発話によって話の流れが変化したり、自ら新たな話題を提供したりして、予期せぬ方向に展開することがある。また、話題に関わる知識が乏しいために会話を維持していくことがむずかしくなることもある。方略的能力とは、このような状況に遭遇したときに対処するための能力で、繰り返し、言い換え、推測、回避、身振りなど、多様な対処方法が含まれる。

8 まとめと今後の課題

JOPT では、信頼性の確保が重要な課題として依然残されている。口頭能力テストの場合、実際の質問に対する具体的な応答が受験者によって異なり、質問から引き出される会話内容を具体的に把握する段階でテストの主観がかなり影響を及ぼすことになる。実際の応答は録音され後に記述・可視化することは可能である。しかし、測定したい発話表現を抽出できているかどうかというテストの実施スキルと共に、発話に対する評価が適切に実施され、公正な結果を導く判定が行えるかどうか高度な評価スキルが求められる。したがって、今後の課題としてはさらなる「評価基準の明確化」と「テスト訓練」を含めた実施に関わる体制整備が求められる。

<引用文献>

近藤ブラウン妃美 (2012) 『日本語教師のための評価入門』くろしお出版。

一般財団法人日本国際協力センター「留学生の就職促進に関する周知及び調査研究 (留学生就職促進プログラム) 成果報告書」(2020年3月)。

Bachman, L. F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press.